様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２１年　５月　３１日現在

研究種目：　基盤研究（Ｃ）
研究期間：　2006～2009
課題番号：　18520584
研究課題名（和文）　新羅の伸張と対外関係の考古学的研究

研究課題名（英文）　The archeological study of extension and foreign relations of Silla

研究代表者
定森　秀夫（SADAMORI　HIDEO）
滋賀県立大学・人間文化学部・教授
研究者番号：90142637

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：考古学・新羅・対外関係・半島統一・陶質土器

１．研究計画の概要

(1)　新羅の半島統一過程は、新羅の国力伸長と周辺諸国(高句麗・百済・加耶・中国・倭)との対外関係が密接に絡み合って進行していく。この統一過程を、文献史料を援用しながら、主に考古資料を使用して解明していきたい。

(2)　新羅と高句麗との関係は、5 世紀前半までは高句麗の影響力が強く、5 世紀後半以降その影響力を排除していくことが文献史料の研究で明らかにされているが、考古資料から対高句麗関係の具体相を明らかにしてみたい。

(3)　新羅と百済との関係は、争い事ばかりではなく、羅済同盟を結ぶなど、複雑な様相を持っている。考古資料から、660 年の百済滅亡に至るまでの新羅と百済との対外関係の具体相を明らかにしたい。

(4)　新羅と加耶との関係は、その地理的近さや習俗の近似から、他の諸国に比べると非常に密接な関係にあったことが想定される。加耶は統一国家を形成することはなく、文献上加耶とされる地域でも 5 世紀にはすでに新羅の影響圏に入っている諸国がある。新羅が最も影響力を行使し、領域化を図った周辺諸国であった。562 年の大加耶滅亡に至るまでの新羅と加耶との対外関係を、考古資料から考察してみたい。

(5)　新羅と中国との関係を示す考古資料は少ないものの、新羅出土の中国陶磁器・ガラス器などの考古資料から、対中国関係の具体相を明らかにしてみたい。

(6)　新羅と倭との関係では、新羅出土の倭系遺物、日本出土の新羅系遺物などの考古資料を駆使して、新羅系渡来人の問題も含めて、新羅の対倭政策を考察してみたい。

２．研究の進捗状況

(1)　倭との対外関係を示す考古資料調査では、日本出土新羅系陶質土器の中には、新羅の中心である慶州の生産品以外に、慶山などの新羅周辺地域の生産品もいくつかあることを確認できた。このことは、対倭関係が新羅中心勢力だけで行われていたわけではなく、中心を外れた新羅周辺地域も行っていたことを示す。一方、新羅地域での倭系遺物に関しては石釧や土師器の出土例は若干あるが、日本出土新羅系遺物の量の比ではない。日本出土新羅系遺物は、新羅中心地域と新羅周辺地域ではその有する意味が異なる可能性があり、新羅系渡来人の実態解明の道筋があると思われた。

(2)　加耶との対外関係を示す考古資料の調査では、大加耶連盟の高霊池山洞古墳群・陜川玉田古墳群、小加耶の固城内山里古墳群など、地域支配者層の古墳から加耶系陶質土器とともに新羅系陶質土器が出土している。その出土量は少ないが、新羅の影響を読み取ることは可能であろう。ただし、高霊池山洞古墳群では、新羅系陶質土器の存在は 5 世紀前半までであり、5 世紀後半から 6 世紀前半のものが今のところ認められない。大加耶自体の勢力伸張の問題とも絡めて、非常に意味深長な考古資料のあり方である。また、大加耶連盟の一員であった陜川玉田古墳群の支配者層の中に、新羅系冠である出字形金銅冠を有する被葬者がいることは、新羅の身分制に組み込まれていたのか単なる下賜品なのか、大加耶滅亡に至る過程を考えていく場合、重

要な考古資料となろう。
(3)　百済との対外関係を示す考古資料の調査では、新羅の支配に入って以降の統一新羅系土器の分布は見られるが、それ以前の新羅系陶質土器は今のところ確認できていない。一方、装身具類の一部で、新羅との影響関係を見せている遺物が若干存在していることを確認したので、加耶や倭のように新羅系遺物は多くないが、百済滅亡前にも新羅の影響が入っていることを知ることができた。

３．現在までの達成度
③やや遅れている。
（理由）
研究計画書に記載した平成 18 年度・平成 19 年度の新羅と倭および新羅と加耶との対外関係の調査に関しては、おおむね順調に進展しているとの自己点検は可能であるが、平成 20 年度の新羅と百済との対外関係の調査に関してはやや遅れていると自己点検せざるを得ない。その理由は、平成 20 年度に新しい研究機関に異動したことによる調査研究への影響である。

４．今後の研究の推進方策
(1)　計画書では、最終年度である平成 21 年度は、新羅と高句麗との対外関係、新羅と中国との対外関係の調査が含まれている。現在、北朝鮮の高句麗関係遺蹟などを調査することはできないため、8 月下旬に中国の高句麗遺跡が集中する桓仁・集安での調査を行い、北朝鮮の調査ができないという不十分さはあるが、新羅と高句麗との対外関係を考察できる調査にしたい。
(2)　計画書では、新羅の周辺諸国との対外関係の総合的研究を行うと記載した。これまでの 4 年間で調査を行って得られた資料の総整理を行い、新羅が半島統一を成し遂げていった過程を考古資料によって考察してみたい。
(3)　平成 20 年度の計画であった新羅と百済との対外関係の調査に関しては、進捗状況がやや遅れているとの自己点検を行った。この新羅と百済との対外関係の調査も、上記した二つの推進方策とともに推進していきたい。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4 件）
① 定森秀夫、愛媛県出土新羅系陶質土器、季刊韓国の考古学、第 11 号、106-109、2009 年、無
② 定森秀夫、愛媛県出土加耶系陶質土器、季刊韓国の考古学、第 10 号、110-113、2008 年、無
③ 定森秀夫、愛媛県出土百済系陶質土器、季刊韓国の考古学、第 9 号、106-111、2008 年、無
④ 定森秀夫、三重県出土陶質土器、季刊韓国の考古学、第 8 号、100-105、2008 年、無

〔図書〕（計　2 件）
① 定森秀夫、鳴門市土佐泊の新羅神社、一山典還暦記念論集　考古学と地域文化、一山典還暦記念論集刊行会、2009 年、803-808
② 定森秀夫、日本列島出土の咸安タイプ系陶質土器、地域・文化の考古学―下條信行先生退任記念論文集―、下條信行先生退任記念事業会、2008 年、369-386